

「経済学の行為遂行性」*

ファビアン・ミュニエーザ、ミシェル・カロン著

F. Muniesa, M. Callon

“La performativité des sciences économiques”

山本 泰三・須田 文明

Taizo YAMAMOTO and Fumiaki SUDA

本稿は、経済学の行為遂行性**の問題を対象としている。言語学における語用論を援用した「行為遂行性」という概念は、以下の事実を解明する。すなわち一般的に科学は、とりわけ社会科学、そしてここで検討されるケースにおける経済学は、世界を表象することに制限されていない。それは世界を実現し、喚起し、構築するのである（少なくとも特定の規模で、また特定の条件で）。言語学において、ある発言が行為遂行的であると言われるのは、この発言が、自らが語る当のものを自らが創り出しているときである（何ごとかを「私は執り行う」と宣言する時、私は、私の発言に外在的な行為について叙述しているのではない。この行為が成就されるのは、それを言うことによってなのである）。こうした直観が、科学へと拡張され、適用されることによって、以下のような状況を形容することができる。すなわち、科学的労働が関与する事物が、たんに叙述され記述されるだけでなく、修正され、さらには存在するようにされるといった状況を、である。経済社会学の領域において、経済学の行為遂行性のテーマは、例えば市場——その構築と維持は、直接もしくは間接に経済学に由来する専門知ないし技術的デバイスから不可分である——の研究において発展している。これらの目標に取りかかるにあたり、経済社会学は科学技術人類学の眼差しに近いそれを付与される。これらの人類学は、科学的・技術的实践は自らが表象しようとする世界の構築に絶えず介入する、と考えるのである。

第一節で我々は、科学技術人類学にもとづいて、社会科学の研究領域として経済学の行為遂行性のテーマを提示しよう。第二節では、経済学の遂行性の複数の側面ないし構成要素を区別

* 本稿は、Fabian Muniesa et Michel Callon (2009) “La performativité des sciences économiques”, in Steiner, P., Vatin, F. (ed), *Traité de Sociologie économique*, Presses Universitaires de France (フィリップ・ステネール、フランソワ・ヴァタン共編『経済社会学概論』), pp.289-321 の翻訳である。以下で言及される「本書」とは、このSteiner et Vatin(2009)を指す。

** [訳注] ミュニエーザ&カロンが導入する“performativité”という概念は、英語圏で用いられているperformativityのフランス語訳である。本稿では訳語として、「言語によって行為をなす」という含意(以下を参照されたい。J. L. オースティン『言語と行為』坂本百大訳、大修館書店、1978)をふまえ、まずは「行為遂行性」をあてているが、文脈によって「遂行性」とした箇所も多い。「遂行する」「遂行的」といった表現も、この行為遂行性という概念と結びついている。

しよう。第三節では、いくつかのケーススタディを要約し、コメントを加えよう。結論で我々は、簡潔に経済学批判の問題に立ち帰ろう。

1. 経済の科学技術社会学

(1) サイエンス・スタディーズの貢献

科学的活動の行為遂行的性格は、科学技術の歴史と人類学において長きにわたって主題となってきた。自然科学の実在論の哲学的問題は、例えばI. ハッキング (Hacking 1983) のような著者たちにより取り組まれてきており、彼らは科学的実践（とりわけ実験室の）が客観的现实として作り出すものへと注意を向けるのである。A. ピッカリング (Pickering 1995) は、科学の純粋に表象的な見方に対峙するために、行為遂行性というボキャブラリーを明示的に使用している。P. ギャリソン (Galison 1997) は現代物理学領域における技術的道具、およびこれらの道具が産出するものの役割の検討により、この種の考察を探究している。統計学とそれが構成することに貢献する量的現実、A. デロジエール (Desrosieres 1993) のような著者たちにより微細に検討されてきた。パストゥールと、フランスの「パストゥール化」に関するB. ラトゥール (Latour 1984) の研究は、実験室の現実変容力の分析にとって肥沃な道を切り開いた。さらに医学と、それがどのように患者の身体を存在させるかは、A. モル (Mol 2002) の研究のように、深く掘り下げられた研究対象となっている。これらの研究および他の多くのすべての研究が、サイエンス・スタディーズにおいて行為遂行性のテーマを構築し、豊富にするのに貢献してきた。サイエンス・スタディーズとは、科学的活動により産出された現実への効果に関わる歴史学ないしは社会学・人類学・哲学における研究を、このアングロサクソンの呼称の下にひとくくりにした学術分野である¹⁾。こうしてサイエンス・スタディーズが社会科学、とりわけ経済学の行為遂行的側面に関心を向けるのもきわめて当然なのである。

経済学の行為遂行性の研究に明示的に向けられた研究プログラムの正当化は、M. カロン (Callon 1998) により提起された。このアプローチの妥当性と豊穣さを証明した最初の研究は、D. マッケンジーとY. ミロによるものであり、それは膨大な調査の後に、現代金融市場の形成における金融理論の役割を解明したのである (Mackenzie 2003, 2004, 2006; Mackenzie et Millo 2003)²⁾。市場がどのように創出され変容されるかについての特別な視点を提示することで（そしてこの視点は、狭義の市場以外の経済的事物、企業や国民経済、公共政策などへ適用できる）、サイエンス・スタディーズへのこうした依拠は、経済社会学の領域に対して新しい資源とアプローチを追加することになる (Fourcade-Gourinchas 2005; Fourcade 2007; Steiner 2007; Fligstein et

1) 「サイエンス・スタディーズ」の分野への入門については、Pestre (2006) およびVinck (2007) を参照せよ。遂行性のプログラムの実施において重要な役割を演じた翻訳の社会学（ないしアクター・ネットワーク理論）の説明については、Callon (1986)、Latour (1995)、Akrich, Callon, Latour (2006)、Muniesa et Linhardt (2006) を参照せよ。

2) これらの研究の概要については、本書所収のO. ゴドショの章を参照せよ。

Dauter 2007; Pinch et Swedberg 2008)。しかしこの領域における社会学的注目を増加させるよう動機づけているのは、とりわけ世界への経済学の影響力の経験的争点が確認されていることである。汚染権市場やハイリスクの投資基金、労働市場の自由化、大企業の戦略、中央銀行の貨幣政策、公的財政改革などをすぐに挙げることができよう。つまり経済学者たちは、そのテクノロジーとその知識によって、こうした現実とそのほかのすべてにおいて働いているのである。世界の「経済化」のこうした審級を社会学的に分析することは、技術と、それに伴う経済知識についての、その内容とその形態、その力とその脆弱さについての注意深い検討を通じてなされる。

行為遂行性のプログラムにおいて経済学は包括的に考察される。すなわちある場合においては純粋に学術的な世界に属するような科学（経済学部で教えられていること、もしくは大学の研究室においてなされていること）であり、しかし別の場合では現にそれが使用されている領域（企業や研究開発機関、研究所、官庁、公的機関のエコノミスト）に位置づけられる。厳密な意味での経済学（ミクロ経済学、マクロ経済学、エコノメトリクス、数学的手法、金融論、ゲーム理論）に、広義の経済科学として付け加えられるのが、マーケティングや会計、経営学、統計学、法律学である³⁾。世界の経済化へのこれらの経済科学の貢献を研究することは、こうした経済化が一義的で一方通行的であると考えさせるべきではない（Munieza, Millo et Callon 2007）。特定の時代と空間においては新古典派経済学の視点が顕著に支配的であるが、遂行的プログラム（とその実現）の膨大な組成の中においては、それはその他大勢のうちの一つではない。ケインズ主義もしくはソヴィエト計画経済はそれぞれ、それ自身の経済学を備えており、その遂行的モメントによってもまた特徴づけられる。しかもこのリストはそれにとどまらない。進化経済学と新制度派経済学は、とりわけ欧州で、イノベーションの政策の精緻化と実施において中心的役割を演じている。もしある経済世界が、所与の時点と場所で「需要と供給の曲線が交わる」空間として遂行され得るとしても、この経済世界は別の場所と時間では「インフレと貨幣量の調節」の空間として、もしくは「消費者の魅了の」空間、「契約が取り交わされる」空間、「資源の合理的配分の」空間、さらには「技術的創造の」空間として遂行されるかもしれないのである。

(2) 社会学的伝統

なるほど経済学の行為遂行性の問題の学術的、プログラムの興隆が、(マッケンジーのように科学技術人類学に依拠している)最近の経済社会学の研究に見られる。しかしこのテーマは、別のボキャブラリーをまとっているが、社会科学における多様な伝統に連なっていることも否定しがたい。社会的世界の布置は、少なくとも一部は、特定の知識の実施と特定の実践の展開に依存していること、また科学的知識と技術的实践とが「近代」と呼ばれる世界の布置においてとりわけ重要な役割を演じていること、さらにこれらのすべてが経済問題に特にうまく適用されていること——以上のことが、この学問の確立以降、共通に受容されてきた多くの社会学

3) このマーケティングについては、とりわけCochoy (1999, 2002) の決定的な研究を参照せよ。

的提案を構成しているのである。こうして経済学の行為遂行性という考えは、社会科学における伝統の豊穡な全体へと結合されるのである。

例えばK. マルクスのように、資本を、ある意味では定式化ないし記述に属するが、特定の物質的条件の下では労働過程の実質的包摂に至るような関係として考察することは、企業における利潤の抽出と分配（企業会計、経営管理、経営上の研究、とりわけ労働法）を組織することを可能にする様々な知識の遂行的役割に対していっそうの注意を向ける思考である⁴⁾。とりわけM. ウェーバーの研究によって理解される合理化というテーマは、経済知識が適用される世界についての、合理化され測定可能な経済的知識の効果の研究にとって、豊穡な指針を切り開いた（Steiner 1998; Bidet et al. 2003）。

M. フーコーは「統治性」の概念によって、またとりわけ新自由主義の事例へのその適用によって（Foucault 2004）、経済学的、会計学的、経営的知識の規律訓練の役割に関心を向けた研究の伝統を促進した（Burchell, Gordon et Miller 1991; Miller et Rose 1990, 2008）。一般的に知識社会学、特殊には科学的知識の社会学は、R. K. マートン（Merton 1949）にとりわけ由来する「自己実現的予言」の概念、U. ベック、A. ギデンズとS. ラッシュ（Beck, Giddens & Lash 1994）のような著者たちにより発展された「再帰的近代化」の概念、B. バーンズ（Barnes 1983）のボキャブラリーにいっそう近い「フィードバック・ループ」の概念などを使用する。これらの概念は、組織された知識の大規模な適用により種別的に促された社会学的状況を理解するという意欲を示している。すなわちそれこそ「知識」についてのその素晴らしい報告においてJ.-F. リオタール（Lyotard 1979）によって描かれた世界のとりわけ顕著な特徴なのである。

経済学者の科学を、例えばイノベーションの源泉として考察することで（Faulhaber et Baumol 1988）、もしくは、公共政策の運営における経済学者の役割を検討することで（Nelson 1987）、経済学が研究するものに対して自らの科学が持ち得る影響力について、経済学者たち自身もまた絶えず自問自答している。経済学の「規範性」もしくは「実証性」についての通例の認識論的、方法論的論争は、——たとえそれが、科学的実践の経験的に不正確な思考（行われている科学というよりも、語られているような科学を考える）にしばしば依拠しているとしても——その真実の価値についての純粋な問題提起を超えて、科学の実践的效果の問題に関するなにがしかの関心を示している。

(3) 行為遂行性によるアプローチ

ここで主張されるアプローチは、行為遂行性という概念を中心とした理論的ボキャブラリーによって、これらの様々な研究と考慮の間での理解可能な結合を打ち立てることである。それは、通常の学問分野別の区分とは少しずれた視点を要求する検討に対して理論的手法を提供する。行為遂行性のプログラムに同意することで、経済社会学における研究はもはや経済学とその研究対象を分け合うことで満足せずに、経済学を自らの研究対象の中にも含めるのである。経

4) 例えば、本書所収のE. シャペロの章、さらに平行してChiapello (2005)、Chiapello et Medjad (2007) で展開された会計基準についての研究を参照せよ。

経済的エージェントおよび経済的事物の通常のリストに加えられなければならないのが、これを研究する人々、彼らが構想し産出する知識と技術的デバイスである。こうしたアプローチは自明ではなく、多くの抵抗を引き起こす。というのもそれは学問分野の伝統的学術区分を側面攻撃するからである。そのうえ遂行性の概念は、お互いに全く離れた、異なった研究を関連づけるという利点を持つので、この概念は過剰な多義性を被っている。それは膨大な種類の使用の的となっており (Denis 2006)、一義的な技術的専門用語としての地位を主張することができない。我々がここでこの概念を採用しているように、それはすでに言語学の語用論を科学技術人類学に援用した結果である。そこから純粋に言語学的側面を排除することで、また物質的次元を含めることで、こうした援用は、例えばJ. L. オースティンもしくはJ. サール (Recanati 1979, 1982) の研究によって言語学者がこれに与えてきた意味を修正した。すなわち遂行的発話の成功条件は、たんに言語学的な条件であるばかりでなく、すでにブルデュー (Bourdieu 1982) により確立されていたように、社会学的条件でもある。この概念はまた、エスノグラフィーや、フェミニズム批評ないしは文化研究によって動員されている——とりわけJ. バトラーのように、この概念が含意し展望する劇場性の意味、例えば行動としての、もしくは舞台化としてのアイデンティティを強調する著者たちによって (Butler 1990, 1997)。組織の記号論もまた、テキストがどのようにモノを組織するかの仕方について集中することで、行為遂行性の問題設定に取り組むことができる (Cooren 2000, 2004; Cooren, Taylor et Van Every 2006)。遂行性概念の多義性は現実の構築における知識の役割に注目しているのだが、もし検討をやめ、あれこれの知識もしくは理論・モデル・発話が行為遂行的であるか否かを決定することだけを目的として自らに与えるようなものとしてこの概念が使われたならば、確かに問題をなすであろう。逆に、この概念が知識の役割に注意を向ける疑問の形態として、探究の機会としてとらえられるならば、それはその肥沃さを開示することであろう。経済学の行為遂行性についての近年の議論 (MacKenzie, Muniesa et Siu 2007; Lenglet 2006; Kjellbert et Helgesson 2006, 2007) は、この研究領域における遂行性のボキャブラリーに関する可能な二つの方向性を提案した。第一の方向性は、言語学的現象に、つまり経済学により産出された言明とその流通、その効果に敏感である。こうした流通とこれらの効果は、なるほど物質的实践と技術的デバイスにより道具化され、媒介されている。しかし強調点は、経済学により「語られる」モノに置かれる。すなわち理論や予言、思考、そのほかの生産 (言表の形で提示される) である。この場合、真実化 veridiction の問題 (いかにして、ある提案が、その遂行的効果によって「よりいっそう真実」になることができるのか) が中心的である。マッケンジーは、オースティンとバーンズの視点に言及して、遂行性のこうした観念を「オースティンの」ないし「バーンズの」と呼んでいる (Mackenzie 2007)。マッケンジーが「一般的」と呼ぶ行為遂行性のボキャブラリーの第二の方向性は、経済学が定式化する言表を唯一の側面とするよりも、むしろそれが情報提供する実践の観点から経済学を検討する。「語ること」よりもむしろ「行うこと」に強調点が置かれる。この方向性に属する探究は、経済的世界の構築を下支えする社会技術的デバイスないし配置 [agencement] の研究に集中する (Callon 2007; Callon, Millo et Muniesa 2007)。こうした研究が「行為遂行性 performativité」よりも「遂行 performance」の概念を好むのは、遂行することは行動であり、

労働である（たいていの場合集合的であり、「協働遂行 *coperformation*」という概念はこのことを強調する）という事実を強調するためなのである。理論的観点からは、この種の方向性はアクターネットワーク理論、その記号論的・哲学的道具に近い。しかしそこで重要なのは、別の領域におけるように、均質的でもなく専一的でもなく両立不可能でもない方向性なのである。

その多様性と複雑性において遂行の労働をとらえるためには、その多様な側面の輪郭を描くことを可能にする一連の問題から出発するのが簡便である。観察可能な緊張を強調するこうした提示は、この概念が引き起こす概念の多義性と分類を正当に評価するという利点を有し、しかもユニークで整合的な視点（経済学を、経済の中の完全なる権利を持ったアクターとする）を維持したままなのである。これらの構成的緊張の提示へと、我々は今や目を向けよう。

2. 遂行性とその構成的緊張

(1) 理論的遂行と実験的遂行

経済学の行為遂行性について語るときに、なぜ、遂行されていることが常に「経済理論」のことであると、誤って考えてしまうのであろうか。これは、経済学が理論的である場合も含めて、科学一般と同様、経済学は実践に関わることでありという事実をあまり考慮しないような、科学的作業についての主知主義的見方が特権化されていることと関連している（Hacking 1983; Pickering 1995; Latour 1996; Knor Certina 1999）。このことは、学校や大学での経験により誇張されて特徴づけられた経済学の見方が特権化されていることと関連している。ところが経済学は、それが借用されるべく図書館の棚に思慮深く並べられることを待っているような概論や、授業のためのマニュアルを産出することにとどまらない。フランスにおいて、きわめて明示的に諸科学の間、そして国家と企業の間で交差点に位置づけられているエンジニア・エコノミストの歴史的姿態は、それが学術世界の外部から検討されるとき、経済学がとりうる遂行的外観を想起させることができる。こうしたエンジニア・エコノミストの姿態は、経済の構築と苦闘するエコノミスト——一連の学者的教説をくり広げるという唯一の課業によってよりも、経験的状况の問題化や解決策の探求によって動機づけられている——を登場させる（Vatin 2007, 2008; Grall 2004; Somoni et Vatin 2002）。しかしながら経済理論とその遂行的射程の問題は、手つかずのままにおかれるべきではない。定型化され、形式的で、抽象的なこうした人工物が経済学の重要な生産をなしているのである。学術的知識が教義総体と同時に世界（とりわけこうした教義総体が正当性を有している大学周辺に挿入されている）を産出するようなことが起こる。しかしまた、教義が大学の学部やその研究センターを出て、外で、また他の教義とともに、自分たちにとって好都合な環境を構築するようなことも起こるのである。

こうした考慮は、ヒューリスティックに二つの状況を区別するよう我々を導く。最初の状況は、理論的遂行と呼ぶことができるものに属する。それは理論に合わせて世界を構築することが争点であるような、すなわち理論的体系の中で抽象的に事前に表明されている問題と解決策の全体を世界へと当てはめることを争点とするような布置を、特徴づけている。我々が実験的遂行と呼ぶ第二の状況はまずエンジニアリング状況と結合されている。そこにおいては、問題的状况

況を変容させるために動員され、提起された問題に解決策を与えることができるようなモデルと措置、道具を徐々に精緻化するために、アプローチは問題と問題的状況から出発する。

(2) 心理的遂行と物質的遂行

集合的信念（ないし表象）という概念がしばしば、「自己実現的予言」のような現象を理解するために動員される。その上こうした概念は、コンヴァンション経済学（世論や確信、信念、そしてとりわけその模倣的追従が経済行為において有する役割に明示的に関心を向ける研究の潮流）の主要な資源をなしている（Orléan 1999）⁵⁾。経済学でさえ信念として考察されることができ（Lebaron 2000）⁶⁾、場合によっては、その心理学的、精神的、イデオロギーの効果の点から研究されることができる。ある経済的信念を信じること、それに同意して行動することとは、「影響力」の可能な一つの事例でしかない。新古典派経済学の教義であれ何であれ、いかなる経済学の教義も信じることなく、我々は市場で新古典派的に行為するように導かれることができる。すなわち市場の設計が我々にそれを強いるだけで十分なのである。Marie-France Garica（1986）により分析されたフォンテーヌ・アン・ソローニュ地方の電光掲示板での市場の例において、競りでの販売装置（学者的に構想されたその設計は、新古典派ミクロ経済学の市場的遂行の基準から直接に着想を与えられた）は、すっかりくまなく市場的行為を変容させた。しかも、これに参加するソローニュ地方のイチゴ生産者が突然に経済理論を信じることもなかったのである。経済的行為の形成における技術的デバイスの役割についての研究（Callon, Millo et Muniesa 2007）、もしくはより広範に行為における事物の役割に関する研究（Akrich 1987, 1989; Concein, Dodier et Thevenot 1993; Concein et Thevenot 1997; Latour 1994）は、物質的道具装置が、しばしばレトリック的信念と同様の効率的な遂行性の担い手をなしていることを示している。しかしながらとりわけ経済学が意識内容を直接目指している状況においては、経済学のレトリック的、教育的側面が軽視されてはならない。

経済学の行為遂行性に関わる研究におけるこうした緊張の考慮の必要性を強調するために、我々は、遂行性の二つの構成要素を区別するよう提案したい。すなわち、我々が心理的遂行および物質的遂行と呼ぶものである。最初の遂行は、経済学が、これを担い、伝達し、吸収する者たちの、とりわけ心理的体験として表明されるような状況に言及する。すなわちこの場合、経済学は、推論および確信の形でのみならず、お気に入りの比喩の形で表明されるのである。第二の遂行は、（ある行為の仕方を担い、もしくは導く）技術とデバイスの構想と実施に適用される。すなわち遂行性はとりわけ、物質的配置に関わるものとなる。

(3) 分散的遂行と計画された遂行

経済学が「それだけで」、またそれ自身の力によって、自らが叙述する現実を遂行するような状況を、特権化すべきなのだろうか。遂行はたいていの場合、集合的作業である。それはま

5) 本書所収のA. オルレアンとF. エイマール＝デュヴルネの章を参照せよ。

6) 本書所収のF. ルバロンの章を参照せよ。

れにしか孤立した審級（自分自身のユニークな重要性によって世界を修正するような）には関わらない。遂行のエージェンシーは複数である。遂行的プログラムは入り組んでおり、自由なもしくは強要された協力の関係もしくは競争の関係、しばしば寄生関係にさえ入り込む。経済学がそれだけでは作用しないからといって、経済学の役割を失墜させることは、経済的現実の構成の政治的性格を無視することにつながる。経済学者たちが、経済の機能の変容の主要な担い手ではなくとも、（民主主義的論争から軍事クーデタにまで至ることができる環境の中で）こうした変容を課した政治的審級に同伴してきたような事例はおびただしいほどある。指令語（Deleuze et Guattari 1980）のように典型的な行為遂行性の姿は、経済世界にとってなじみのないものではない。そこでもまた大事なのは、経済学の使用が差異を産出するような状況を突き止めることである。すなわち、世界はこの科学が存在しているか否かによって、同じようには輪郭が描かれない。その上、歴史的に同定可能な事例（そこでは政治的強要が遂行の主要なメカニズムである）の存在は、遂行が自発的な採用の様式にもとづいてもなされるという事実を隠蔽すべきではない。制度の経済学的、歴史学的分析において展開されている「経路依存性」や「ネットワーク外部性」といったボキャブラリー（David 1985; Arthur 1994; Callon 1991）は、経済学の普及とその発明、その技術およびそのモデルの普及過程の分析に厳密に適用することができる。こうした状況において、経済的手法は、時間的・空間的にローカルないくつもの小さな出来事から課せられていく。そして徐々に、またネットワーク状の論理に従い、長期にわたる普及過程の終わりになって、重大な一般性と不可逆性の効果を産出することができるのである。

計画された遂行に対照させて分散的遂行について語ることは、経済学の遂行的効果が多くのやり方で担われうることを想起させる一つのやり方である。分散的遂行の状況において我々はむしろ、自然発生的とまでは言わなくとも、少なくとも弱く計画され指揮された過程に直面している。すなわち経済学的人工物が適切な場所で、適切な契機に見いだされ、そこで人工物が使用されるという事実が、この人工物に対して、まずはローカルなその成功を、次いでそのより一般的な普及を保証するのである。計画された遂行とは、プログラム（経済計画を実施するためにそこから展開する——すなわち我々は改革や革命、植民地化の企図という政治的な領域にしていることになる）の素描とその指揮により特徴づけられた状況と関連している。

(4) 狭い遂行と拡大された遂行

経済学の行為遂行性は、科学の世界からその「外側」へと移動する動きとして理解されなければならないのだろうか。遂行すること、それは喚起すること、制定すること、構築すること、何かが生起するようにさせることである。この「生起」の「場所」が具体的に精査されなければならない、しかも可能な場所の位置を、一方の科学と他方の外部世界との間での戯画的区別へと縮減することを回避しなければならない。例えば理論を提案するある経済学者は、自らの想像力の賜物である形式的空間の中で、この理論を構築することができる。公理系のボキャブラリーの、古典的な「仮にそうだとして」を活用することで、その遂行的身振りとそれが構成する配置（正規直交した空間、方程式など）は、特異で狭い世界を構築し、そこでこの理論は生

ることができる——この理論が科学論文の外側に、もしくは教室の外側に、それほど「快く受け入れられ」ない、幸運な条件が整っていない空間へと移転されるとき、この理論は消失することを宿命づけられているとしても。逆に、もし移転がうまく準備されているならば、それは理論の妥当性と効率性の領域を拡張することができるのである。かくして実験経済学の実験室もしくはコンピュータ・シミュレーション（経済学者により適切に配置され、監視されている）は、別の世界——そこで絶えずテストされ改善されるその提案は結局、自分にとって都合が良い環境、またこうした提案があてはまるような環境を見いだすようになる——を構築するように構想され、調整されることができるのである（Guala 2005）。実物大の経済市場のような、別の場所への別の移転が検討可能である（Guala 2007; Muniesa et Callon 2007）。これらの移転のそれぞれは種別的作業を必要とする。実験室の「閉じられた」環境で言明ないしモデルの都合の良い条件を構築することは、「屋外での」市場の中でこれを構築するのと同じことではない。すなわち後者の場合、提示とその公衆の問題がより政治的なタームにおいて提起され、遂行のデバイスの交渉が決定的となる（Callon, Lascoumes et Barthe 2001; Latour 1999; Barry 2001）。モデルの普及やその応用とは全く異なったこの移転は、それでも機転と外交術をもって導かれるならば、成功することがあり得る。

我々が狭い遂行と呼ぶことができる状況は、遂行の場所と、そこで起こることのコントロールとの高度の閉鎖性によって特徴づけられる。好都合な条件は、厳密な意味での科学的共同体に固有なルールと慣行にいつそう純然と帰属している。逆に拡大された遂行の状況においては、産出され、もしくは関与されるアクターおよび事物のリストはよりいつそう開放的であり、好都合な条件についての不確実性の水準がいつそう高くなり、民主主義の問題がいつそう重くのしかかる。

(5) 遂行的な全体

配置を設定し、もしくは修正する活動と出来事の全体として遂行を定義することで、上述のことを要約することができる。ここでは我々は、フーコーに倣ってG. ドゥールーズが装置 [デバイス *dispositif*] 概念に与えたのと近い意味で、配置という概念を用いよう。彼は、装置の複線形的特徴、その異種混交性（それは言語、事物、主体を含む）を、また非体系的な特徴（これが分岐を通じて、進化的、イノベーション創発的能力を装置に与える）を強調する。

我々が記述してきた行為遂行性の4つの構成要素は、経済的配置であるこうした奇妙な空間を構成している4つの緊張を定義し、経済的遂行の経験的状况を特徴づけ、差異化することを可能とする。すべての遂行性は、これらの緊張を組織しているそれぞれの問題に回答を与える。しかもその反対者に対して、ある回答に完全に有利に裁定することなくである。遂行の活動は、それが創り出すのに貢献する配置に倣って、理論的であると同時に実験的であり、心理的であると同時に物質的であり、分散されていると同時に計画化されており、狭いと同時に拡大されている。しかしこれは、すべての遂行とすべての配置が同一であるなどということを意味してはいない。異なっているのは、それぞれの緊張に与えられる重要性であり、問題（それぞれお互いの基礎となっている）に付与される回答のタイプである。（遂行が産出する分析において

と同様、それが採る介入様式において）配置の物質的側面を特権化する遂行は、しかしながら、配置の別の構成要素とそれが生み出すジレンマに無関心ではられない。

その多様性と複雑性において遂行の労働を具体的に、かつ实际的に理解するためには、4つの構成的緊張により提起される問題から出発することが簡便である。あらゆる遂行的活動が直面する最初の緊張（理論的遂行 vs 実験的遂行）は、遂行の対象と、遂行される配置の予示の度合いに関わる。我々は、理論においてあらかじめ定義されている経済的形態の実現に直面しているのであろうか。むしろそれとも、探求活動（そこでは、実現されることは経験の最中に定義され、入手可能な理論的資源の必要性から、自由に着想される）を観察しているのであろうか。第二の緊張（心理的遂行 vs 物質的遂行）は、経済的配置における主観性とその場所の問題に関連している。遂行される配置は、とりわけ装置とメカニズムを通じて作動するのであるか。どこでそれは主観性を構成するのであるか。第三の緊張（分散された遂行 vs 計画された遂行）は、経済的配置の歴史と、とりわけその政治的歴史に関連する。経済的配置は、複数の偶発的な、偶然の機会の思いがけない結果なのであるか。それともこうした配置は、（その成功に不可欠な道具を装備された）少数の自発的なイニシアチブに由来するのであるか。第四の緊張（狭い遂行 vs 拡大された遂行）は配置の本質的特徴の一つに向けられている。すなわちその場所、その領域である。観察されている遂行の作業は、唯一の場所に閉じられているのであろうか、それとも逆にそれは、ある場所から別の場所へと容易に流通し、こうして、（遂行に好都合な条件を保証する）配置の射程範囲を拡大することができるのであるか。

遂行活動が直面している4つの選択は、経済的配置の構成における経済学の介入様式を定義する。こうした選択はまた、なぜ遂行性の一つの、もしくは複数の特徴が所与の状況において支配的となることができるのかを説明する。分析者はここで指摘されている制約を遵守しなければならない。すなわち経済的配置が複雑な空間であること、この空間を構成する遂行的継起がこの空間全体において同時的に展開すること（たとえ経済的配置がその特定の構成要素を特権化するとしても）、こうしたことを無視しないという制約である。以下では、これらの経済的遂行活動の多様性と統一性が説明される。

3. いくつかの経験的研究

(1) 組織された自然資源市場

自然資源の私有化は、それが経済学者の研究により知識を与えられるとき（これはしばしばあることなのだが）、経済学の行為遂行性の興味深い力を見せてくれる。スカンジナビアでの海水面での漁獲割り当ての確立は、かかるものとして、遂行性とその代替的なボキャブラリーの明示的議論により社会学的観点からかなり研究されている（Helgason et Palsson 1997, 1998; Holm 2007; Holm et Nølle Nielsen 2007）。生態学的危機をもとにした市場拡張の典型的主張としてしばしば主題化されている、交渉可能な個別漁獲割り当てシステム、すなわちITQ（個別移動可能クォータ）は、新古典派経済学的な推論の、特徴的な、ないし典型的な構築物として現れる。すなわち、経済的エージェントが合理的になり、ものを浪費するのをやめるのは、この

ものを市場的にすることによってなのである。これらのシステムを実施させるために必要な制度的事業はかなり重厚である。すなわちそれは、それまでは共有されていた財についての私的所有権の実施と、次いで、これらの権利の市場的交渉を可能とする枠組みの組織化を通じてなされる。漁業者は漁獲割り当て所有者となり、新たな経済的最適化の計算に取り組むことになる。仕事は変容し、海との関わりももはや同じではない。測定され、量化され、見積もられ、経済化されて、自然資源そのものが変質するのが見られる。

環境経済学者たちは、自然資源の枯渇を防止するための闘いにおいて自らが効率的と判断するこうした経済的装置の発展に参加したことを、心より誇りに思っている（Wilén 2000）。彼らは、おそらく、ホルムとノルド・ニールセン（Holm et Nørdlie 2007）が指摘しているように、彼らとその同僚たちにより精緻化されたモデルが遂行的役割を演じたことを認めるにやぶさかではなかろう。たとえ、とりわけこの表現が、理論（自分にとって外在的な現実を自分だけで変容する尋常ならざる能力を付与されている）の純然たる適用を意味していたとしても。しかしながらノルウェーの事例の注意深い検討は、経済理論の純粋な「適用」に対応してなどいない状況を明らかにしている。その研究において、P. ホルムとK. ノルド・ニールセンは正当にも、ノルウェーの個別移転可能クォータ（ITQ）のノルウェーの解決策メニューのあらゆる要因（経済学はそのうちの一つでしかない）、およびその歴史に点在する論争すべてにも注意を払った。こうして彼らは、資源枯渇に対応するために、クォータの市場を組織するというノルウェー公権力によりなされた提案（1989年）が引き起こした抵抗を解明したのである。当該部門の職能団体は、この措置の中に、職能団体の機能にとっての脅威（とりわけ工業的集中化のリスク）を見て、即座に彼らの懐疑を表明し、抗議運動を開始した。提案はすぐに葬り去られたが、年月を経て、クォータ交渉のインフォーマルな実践が慎重に登場し始めた。貨幣的な取引は、漁獲高割り当てに直接は関わらない。それは副次的市場、つまり船舶（その規模により評価される漁獲高クォータはこれに結びつけられている）の市場で展開する。こうした回り道の後でのみ、インフォーマルにすでに形成されていたものの微妙な公式化によって、ITQの市場が、2004年以降、実際に設立された。

ノルウェーのケースにおいては、クォータの市場化の過程は、あらゆる経済的遂行の様々な構成要素をバランスよく結合している。すなわち実践的問題の解決と、理論的モデルの実施である。心理的転換と物質的装置の精緻化であり、とりわけ度量衡道具の精緻化である。また分散的遂行が計画化された遂行に代替している。狭い遂行の長い期間に引き続いて拡大された遂行が来る。その上、この事例が示しているのは、経済学（この場合は環境経済学）により提案された「解決策」は、それが検討している世界にたいして即座の直線的な影響を行使することではない。この事例は海洋資源の測定手法とクォータの計算手法の遂行的性格をいっそう興味深く明らかにしているのである。すなわちこうした道具は、経済的希少性を構築し客観化することと同時に、経済的行為を存在させることを可能にするデバイスを構成するのである。

この研究の著者たちが指摘しているように、より計画され、より理論的な遂行性の形態は、例えばニュージーランドやアイルランドにおける漁獲高クォータ市場について同定することができる。しかしノルウェーの場合においては、クォータの市場化過程は、むしろ我々が分散さ

れた、実験的な遂行と呼んだものに対応しているように思われる。すなわち共同構築（共同遂行）の緩慢な、それほど計画されていない過程が海洋学エンジニアを関与させるのである。しかしながら2つの場合において市場の設立は、経済モデルの動員なしには、文字通り考えも及ばなかったことであろう。

(2) 戦略的管理と企業家的計算

大企業は、コンピテンスやノウハウの行使、もしくは多くの場合高等教育（とりわけエンジニアないし高等商業のグランゼコール。そこでは経済学と経営学の教育が重要な位置を占めている）において獲得された技術の実施についての、特権的な領域をなしている。企業家教育産業で実施されている教育手法（ハーヴァード・ビジネス・スクールによって開発された「事例」システムのような）が遂行的側面を有するのは、こうした手法が、特別な語りの配置のおかげで、大企業の中で重要な責任を獲得した卒業生により採用されうるような流儀を担っているという意味においてなのである。企業内部に、特定の形態の経済学的もしくは経営学的な知識が遂行的に入り込みうる別の経路は、例えばコンサルタント会社や調査機関のサービスによって可能である。企業の経営管理における遂行のテーマは、経営学的言説や戦略分析の効率性に関心を持った研究者により明示的に動員された(Froud, Johal, Leaver et Williams 2006)。コーポレート・ガバナンスおよび株主価値の主要なテーマは、学問的世界と経済的世界との間で流通する（後者にとっては、それと並行して進んでいる企業の「金融化」の実践とともに）。

エンジニア・エコノミストおよび大規模公共企業（彼らがしばしばこれを運営管理するように召還された）のフランスの伝統は、本稿で探究されるタームにおいて検討に値する状況を生み出した。フランスにおいて電力供給を担う公的企業であるフランス電力公団（EDF）の事例は、かかるものとして顕著である。当然のことながらこの企業はエンジニアの科学の発展に留意し、その創設以来、社会科学およびその使用にもきわめて開放的であった（Meynaud 1996）。経済学者、とりわけ経済計算の役割は企業の経済戦略の展開において際立っていたし、フランスのエネルギー戦略の展開において先駆けとなった（Picard, Beltran et Bungener 1985; Hecht 2004; Muniesa et Callon 2007）。フランスの民間向け原子力計画の歴史についてのG. ヘクトの著作はとりわけ、自らのモデルを装備した経済学者たちが、いかに1960年代初頭に実施された選択に重要な役割を果たしたかを示している。この時期にこそ、CEA（原子力エネルギー庁。原子力エネルギーの発展のためのフランスの当局）により主張されたモデルに直面して、EDFが、自らの原子力（および経済）モデルを課することに成功したのである。このエピソードは「競争力あるキロワット時」をめぐる技術的論争に結晶化され、この議論の結果、電力市場の構造が転換されたのである。ヘクトによれば、マルセル・ボワトーの指揮の下で、少人数のエンジニアや数理経済学者のチームにより、EDFのSEEG（一般経済研究部）および計画庁（経済計画のためのフランスの政府部局）のなかで作成された経済的最適化モデルが決定的な役割を演じた。その目的は、電力生産を最適化するために、国内電力需要をモデル化し、電力料金に影響を及ぼし得る要因を分析し、運営管理手法を作成することである。EDFにたいしてその選択を作成し、とりわけ政府に対してこれを擁護することを可能にしたこのような作業は、原子力

に関する論争の用語を再定義するよう促し、EDFにとって好都合な用語にしたがって、検討可能な様々なオプションを計算可能とし、評価可能としたのである（Callon et Muniesa 2003）。このようなモデルの中心にあったのが、電力需要の将来的進展をイメージし、多様な投資戦略をシミュレートし、次いで、選択可能な産業的、技術的軌跡にかかる費用を比較する能力であった。この計算の力強さは、議論の成り行きに対して、またEDFの技術的選択の最終的な勝利において重くのしかかることとなった。CEAの支配、原子炉に関するそのエンジニアやその技術の支配、民間原子力と軍事的原子力とのハイブリッド化は、（そのプログラムが課する）効率性——よりよい熱力学的条件下での最高生産性——とともに、EDFの計算の前に屈服した。逆にその計算は、民間原子力と軍事的原子力との切断の必要性だけでなく、きわめて説得的に、効率性のより経済的な観念の利点を証明していたのであろう。この観念はたんに長期での電力需要の発展のみならず、利子率および減価償却期間を考慮に入れていたのである。こうした移動は、「産出高」（可能な限り多く電力を生産すること）の概念から「収益性」（可能な限り低コストで電力を生産すること）の概念への移行により説明される。ヘクトが示しているように、EDF経済学者による、技術的に測定可能で経済的に意味のあるデータとしてのキロワット時の構築は、こうした大転換の実現において決定的な役割を演じたのである。

この事例が前の事例（漁獲高クォータ）と全く異なった遂行のケースを示しているのだが、それはとりわけ、あらゆる遂行的活動を特徴づけているいくつかの特色を、この例がどのように強調しているかというやり方によってなのである。経済理論、とりわけ一般均衡理論（Cot et Lallement 2006）——ボワトーはCNRSでその研究の数年をこれに捧げた——は、教条的ではなく、それが喚起する計算手法を介して動員される。目標（それはエンジニア・エコノミストの目標なのだが）は、国有企業の政治的管理の問題を一連の経済問題（そのために経済的解決策が見いだされなければならなかった）へと導くことであった。理論的というよりもより実験的で、心理的というよりもいっそう物質的であるこうした遂行は、それが現実経済を強調することによっても特徴づけられる。経済的モデル化は、明らかに公開実験による証明と政治的調整の道具であり、こうした道具が可能世界のなかで最良のもの（エネルギーの選択肢の観点から検討される）を選択することを可能とするのである（しかも現実の経験の対価を支払う必要もない）。結局、EDFにより指揮された遂行は、他の登場人物たちにはいかなる特別なイニシアチブも与えなかった。すなわちこの遂行は分散されているというよりもいっそう計画されており、経済計算はそこでは分権化された選択をシミュレートするためなのであった。

（3）配分メカニズムと効率、競争

実験経済学や経済シミュレーションのような特定の研究領域——経済科学における研究の最先端にあるとしばしば提示されている——は、現実の経済世界の構築に積極的に関与する。これらの領域は、機械科学のそれである、より古い認識論的歴史に統合されており（Armatte et Dahan Dalmedico 2004）、装置や結論、勧告（その推進者たちが、市場的配分システムの合理化への支援として提示する）を産出する。実験経済学の事例はF. グアラ（Guala 2001, 2003, 2005, 2007）により根底的に研究されている。Guala（2007）は、これらの研究で作用している二つ

の論理を区別することを提案する。一方の論理は、経済理論の検証を主要な目的とし、他方の論理は市場のエンジニアリングへと明示的に方向づけられている。最初のケースでは、遂行的側面は副次的だが（あるモデルが頑強であることを検証することがむしろ重要なのであり、このモデルを場合によってはより真実とさせるかもしれないような配置を構想することにはあまり気を配らない）、後者の事例では、遂行的側面がはっきりと要求されている。

電波空間の使用ライセンスの配分のための競売システムの構築におけるゲーム理論家と実験経済学者の介入は、彼らの科学の経験的成功の証拠として、当事者たちによって熱狂的に強調された（Binmore et Klemperer 2002; Milgrom 2004; Klemperer 2004）。全く異なった領域において、それは経済学の行為遂行性についての研究にとって「学びの好機」をなしていた（Guala 2001; Mirowski et Nik-Khah 2007; Callon 2007）。ゲアラの研究（ミロウスキーとニック・カーの研究に引き継がれることになる）は1990年代における北米の電波空間の使用ライセンスの配分様式の改革への経済学の介入の特別な様式を解明した。歴史は、北米テレコミュニケーション規制局（FCC。連邦コミュニケーション・コミッション）による、競争入札ないし抽選による配分システムを開始するという意思決定とともに始まった。政府機関としてFCCは、複数の、部分的には矛盾した目標を有していた。それは、とりわけ経済的効率と技術的イノベーション、ライセンス配分における分配的正義を和解させることであった。FCCは、改革に関連した情報通信会社と同様、1993年以降、コンサルティングを求めて経済学者たちに接触し、オークション理論の専門家にむしろ意見を聞いた（動員された経済学者のリストはとりわけ、Robert Wilson, Paul Milgrom, Charles Plott, Preston McAfee, Jeremy Bulow, Mark Issac, Robert Weber, John Ledyard）。この事例を興味深い（そして複雑な！）ものとしているのは、当時の最高の専門家たちの認めるところによれば、入手可能な理論的モデルは、この種の市場が必要としていたメカニズムのタイプには対応していないということであった。所与の地域における電波の使用についての個別ライセンスの価値は、例えば、隣接した地域において同一電波を獲得できることに依存していなければならない。動員された経済学者たちは、すべてゲーム理論について知っていたが、この種の状況をモデル化するためのお詠えの解決策を有していなかった。つまり彼らは自分たちのノウハウや議論のスタイルによって介入することはできたのだが、それは「お詠えの」解決策の供給者としてではなかったのである。

その名にふさわしいあらゆるイノベーションの歴史におけるように、即座にアクターたちの増殖がみられ、各人が自らのプログラムを擁護した。それは経済学者たちだけではなく、自分の都合の良いように配分システムの改革を導こうと希望する強大な産業アクターたちのプログラムが、経済学者たちのプログラムに追加されたのである。しかし経済学者たちは、彼らの専門的知見から利益を得られることを期待する企業により雇用されたコンサルタントとして、いたるところで動員されたのである。ゲーム理論家に実験経済学者が加わるようになった。彼らは多様な手法と視点を擁護し、FCCに対して、検討される多様なメカニズムの実験的テストを実施する必要があると説得した。Mirowski et Nik-Khah（2007）はこれらの二つの種類の経済学者たちの間でのアプローチの相違を強調している。こうした相違は、最終的に採択されるメカニズムのタイプの選択において決定的となるであろう。ゲーム理論家については、競売メカニ

ムの分析において重要なのは、均衡の獲得条件である（それぞれの参加者が、自らが有する利益に合致した意思決定をとるために彼らが必要としているすべての情報を徐々に保有することを彼らに可能とさせる過程の終わり）。逆に、実験経済学者にとっては、市場は最適化の装置として検討され、決定的な問題は情報処理の組織化のそれである。前者にとって、計算はむしろ、情報を与えられた合理的エージェントのコンピテンスに属する。後者にとって、計算作業の組織者として支配的重要性を有しているのは、市場的装置のアルゴリズム的布置なのである。ここで検討されている論争において、ゲーム理論家も実験経済学者と全く同様に、異なった地理的地帯についてのライセンスの価値の相互依存性という困難な問題に直面していた。実験経済学者が提案したのは、個別的ライセンスについての情報に加えて、様々な競り手によってライセンスの抽選券に付与された価値についての情報が収集されるように、抽選券もまた競売するということであった。ゲーム理論家がこうした提案を批判するのは、それが機会主義的行為を促すことになろうと議論してのことである（密入国者のそのように）。彼らはこの理由ゆえに、「複数の」競売方法を選好する。そこでは、ライセンス全体が同時に次々と販売され、抽選券による結合を考慮した戦略を競り手の負担とさせるのである。Guala (2001)、次いでMirowski et Nik-Khah (2007) が示しているように、最終的に勝利を収めたのはゲーム理論家の勧告であった。このことは実験経済学者たち（とりわけCharles Plottと彼のチーム）が、採用された解決策の試験とコード化の「技術的」作業の間に彼らのいくつかの選好を押しつけることを妨げはしなかった。複数の競売を組織する具体的配置を、実験室の中で明示化する必要があったので、（採用された解決策が除去することができなかったし、除去の仕方もわからなかった）様々な曖昧さと不整合さを彼らが除去しなければならなかったという事実から、実験経済学者は利益を引き出したのである（Plott 1997）。最終的に現実市場に移転されたのは、実験室で構想され、作成され、テストされた（一言でいえば、製造された）オークション装置であった（そのうえ、その移転においては特定の経済学者が装置に付き添った。というのも彼らが、競り手としての役割を演じるためにこの部門の企業に雇われることになったからである）。

こうした遂行は、理論的構成要素の強い存在によって特徴づけられるが、実験的側面の有効な介入を伴っていた。この遂行は分散されているというよりもいっそう計画化されていた。それでもすべてのイノベーションにおいてと同様、集合的側面と社会技術的妥協がなかったわけではない。物質的側面が心理性を圧倒し、自然科学においてしばしば見いだされる転換によって、現実経済が、実験室の実践の次元へと導かれる。すなわち現実経済が「実験室化される」のである！

(4) ポスト・コロニアル経済とネオ・リベラリズム、開発

国民経済は存在するのだろうか。あるいは別の言い方をすれば、特定の自律性を付与された全体として国民経済を考えることができるのだろうか。すなわち生産様式と同時に富の分配様式を規定する、特定数の社会関係の行為と形態を客体化しているそれ自身の組織ルールを持った全体である。よく知られているように、こうした問題は大いに論じられてきた。リストとマ

ルクスとの間の論争が想起されるであろう。この論争は、グローバル化の争点とその効果をめぐる論争によって、今なおきわめてアクチュアルなのである。行為遂行性のプログラムはこの問題に新たな解明をもたらすが、それは、国民経済と呼ばれるこうした現実の政治的構成と、次いでその運営において、経済学的知識と経済学的道具が演じてきた、また少なくとも特定の場合なお演じ続けている役割を強調することによってなのである。ポスト・コロニアル状況こそが、こうしたダイナミズムを追求するための選択の領域をなしている。

エジプトについての著書のなかでT. ミッチェル (Mitchell 2002; Callon 2006) は、フーコーにもとづいて、エジプトの国民経済が近年の発明であることを示している。あらゆる一連の度量衡的投資——その最初には厳密な土地台帳の確立がある——なしには、エジプト国民経済は不可能であったであろう、あるいはその内容は全く異なったものとなっていたことであろう。いったん制定されるや、この土地台帳は農業生産についての情報の作成と収集、次いでこれらの生産活動と関連した課税の実施を可能としたのである。遠くからそれに対して働きかけることが可能となった経済が、きわめて急速に存在し始めた。この経済は、種別的な統計的カテゴリや分類、処理を通じて、明示化され、次いで可視化され、操作可能となった。次いでこうした度量衡的インフラの上に、エジプト国民経済の表象が展開することになった。この国民経済は、測定と管理の道具 (国民経済に形態を与えた) に完全に適合していたのである。ミッチェルは、こうした表象を国際機関がどのように採用し、これを押しつけたかを示した。同時に、経済学者たちで満ちあふれたこれらの諸制度が、ありそうにもない現実 (こうした表象はその利害当事者なのであった) を本当に、存在させたのである。国際機関により支援され、また雑多な専門家によってくり返されることで、このありそうもない現実、この国をどのように表象するか、の共通のやり方を強く条件づけたのである。すなわちナイル川の氾濫と沖積土により肥沃化された狭い帯状の土地のそれである。その狭小さは、急増する人口により促進された。こうした提示は解決されるべき経済問題全体を定義し、それを課した。それは、必然的に制限された資源によって、増加する人口の生存をいかに確保することができるのか、という中心的問題をめぐって展開することになる。政治的選択は、エジプト国民経済のこうしたモデル化により枠組みづけられた。それは、完全に同定された技術問題に対して、できるだけ効率的な解決策を見いだすことにある。エジプトについてのこうした見方は、専門家たちの権力基盤、あるいはむしろワシントンの3つのエージェンシー (専門知の独占を自らに保証していた) の権力基盤をなした——すなわちIMFと世界銀行、USAID (アメリカ合衆国国際開発庁) である。次いでミッチェルは、開発援助に同伴する専門家たちの知識が、エジプトの問題 (これらの知識によって枠組みづけられていた) に答える解決策として、市場の自由化をいかに構築したかを検討している。遂行の循環にいったん入り込むや、そこから脱却するのは困難になる。すなわちエジプトの何らかの国民経済は、社会技術的配置に倣って真に存在するが、それは必然性などではなかったし、ミッチェルがその歴史をたどる協働遂行により枠組みづけられていたのである。

いかに経済学的知識が、自ら構築し、また安定化させようとしている対象をめぐって展開しているかを示すこうした分析は、F. フーケ (Fourquet 1981) の先駆的研究を想起させずにはお

かない。第二次世界大戦の境目まではフランス経済は、とらえがたい、疑わしげで変幻自在な現実にとどまっていた。すなわちこの経済は、客観的に確認しうる事実というよりも根拠なき断定に属する。このとき、それに形を与え、特別な歴史の中へとそれを入らせるために、フランス経済を「明示化する」ことを担う実験室として、INSEEは構想された。フランス経済はテクノサイエンスにより製造されたあらゆる実体の特徴を備えている。すなわち、テクノサイエンスにより制定され、しかしながら全くもって現実的な実体なのである。ドゥルーズにより提案された哲学的ボキャブラリーを採用してみよう。すなわち1940年代に存在していた潜在的なフランス経済の中で、現勢化した一つのフランス経済が見られた。この現勢化過程の中に、INSEEにより動員され、実施された道具とカテゴリ、モデルの総体が見いだされたのである。フランスに特有なものではないこうした運動は、20世紀の最初の数十年において、とりわけケインズの研究を中心にして、次いでレオンチェフにより精緻化された技術により展開されたマクロ経済学に根底的に根付いている。その上、ケインズはインド経済の存在ないし不在についての論争においてきわめて積極的な役割を演じた。それは、英国の経済学者と英国の著名大学で教育を受けたインド人経済学者たちを巻き込んだのであった（ケインズは『インドの通貨と金融』（1913）と題した著作の著者である）。Goswami (2004) が示しているように、様々な登場人物たちが構築している論争と証拠は、インド経済に正確な輪郭を与えることになり、それと同時に、彼らがインド経済を記述するために精緻化した道具はその運営管理に応用されることになったのである。植民地の、およびポスト・コロニアルな行政についての、もしくは南側諸国や東側諸国における新自由主義的経済政策についての近年の研究は、類似した過程を明らかにしているのである（Mitchell 1998, 2005; Elyachar 2005; Bockman et Eyal 2002; Valdes 1995; Dezalay et Garth 2002; Babb 2004）。

マクロ経済学と、そこから刺激され、それを強化する手法とは、国民経済の遂行に強く貢献した。こうした国民経済は、経済を客観化させ、これを現実（これに働きかけることができ、これが特定の行為や特定の選択、特定の考え方、将来を設計する仕方を押しつける）として存在させる可能なやり方の一つしか構成していない。こうした偶有的性格が、構成された国民経済を告発し、市場（最も自然で最も効率的な経済組織の形態として考えられている）の拡大への多くの障害としてこれを提示する分析の中に、登場しているのである。すなわち市場は経済の未来であり、国民経済は経済の過去なのだ、と。発展途上国はそこでまたもやこうした新たな客観性を展開させるための、これを存在させ、場合によってはその優越性を証明するための選択の領土を提供しているのである。

開発に関するネオ・リベラルな専門知に関する最近の研究の中で、ミッチェルは、世界銀行により支援された、企業家でありエコノミストであるエルナンド・デ・ソトと彼の研究所 Instituto Libertad y Democracia（「自由民主研究所」）。ペルーに拠点を置く強力なシンクタンク）により発展された貧困に対する闘争のプログラムについて検討している（Mitchell 2005, 2007）。デ・ソトの2つの著作（de Soto 1998, 2000）の成功は、行為遂行的と呼ぶことができる。提案された主要な考え方は、土地と住居の「インフォーマル」とされる占有を、「フォーマルな」所有権へと転換させること、すなわち法律的に同定可能で、経済的に動産化可能な『資産』へ

と転換させることであり、借金をしたり、起業家活動に取り組むための担保として、貧しい人々はこれを使用できるだろう、というものである。市場に入ることが、貧困から脱却するための技術的解決策なのである。そこに至るための戦略は、(その規範的次元において、改革者により明示的に検討された経済理論が指摘している) 改革を大規模に展開することなのである。

ミッチェルにより提案された分析は、行為遂行性のプログラムの利点を示している。それはとりわけ実証的科学(それは現実の行為を分析する)としてと同時に、規範的科学(それは、自らが産出する確認にもとづいて、こうした行為を最適化するために採用されるべき意思決定を提案する)としてしばしば記述される経済学の認識論の争点と効果をとらえるためなのである。遂行の観点は、明示化と補強のこうした二重の運動を正当に評価する。しかしこの観点は、その好都合な条件、もしくは全く逆にその不都合な条件、その成功とその失敗を分析するために、追求された行動(異なった複数の明示化が可能であり得るし、複数の規範的枠組みが検討され得る)の観察可能な多様性を考慮する。要するに真面目にとらえられるのは、経済学の実験的性格なのであり、それはまさに、とりわけこの科学が大規模に、困難で不安定な背景において展開しているときにそうなのである。価格づけのブラック・ショールズ・モデルが、このモデルが構成し、また枠組みづけるのに貢献した(しかしあれこれを契機として氾濫がないわけではない)金融市場で日常的に試験されているのと同様に、デ・ソトの所有権理論は、その射程範囲と、限界を明示化するような出来事と連鎖反応を発生させるのである。行為遂行性のプログラムは、あらゆる科学(それが社会科学であろうと、自然科学であろうと)にとって決定的な真実さの試験の問題を前面に押し出すことを可能とする。このことが意味するのは、デ・ソトにより精緻化され実施されたプログラムは、その推進者(彼らがどれほど強力で、多数で、相互に連携していようと)により追求された明示的な目的、すなわち貧困に対する闘争と企業家的イニシアチブの欠如に対する闘争(それこそその主要原因と想定される)という観点からのみ検討されることはできない。デ・ソトのプロジェクトは、(それが引き起こす抵抗と、プロジェクトを引き継ぎ、それに同伴し、もしくはそれと闘うプログラムの膨張とを通じて)、経済的配置の構成をもたらす。この配置を少しばかり検討してみれば、これらの配置は、目標とされていたものとは全く異なっていることがわかる。ミッチェルが示しているのは、エジプトの事例において、産出された帰結の一つ(他の諸国ではこうした帰結は異なっている)は、特定的人类学者がインフォーマル経済と呼んだものを、市場の、またフォーマルな経済として考えられているものの不可欠な補完物として、打ち立てることなのである。当初の目標に対してずらされた、ないしはそれと対立したこうした結果は、デ・ソトが責任を担う経済の表象(実証的であると同時に規範的な)が現実に対応していない、などという結論を導くべきではない。ミッチェルは続けるのだが、デ・ソトの提案をけなし、彼の非現実主義とそのイデオロギー的性格を告発し、それが隠蔽したそれを明示化している政治的利害、支配欲を暴露することは容易であろうし、魅力的でさえであろう。所有権の理論は、それが経済的現象について与える表象の正確さもしくは不正確さの観点から分析されることはできない。その意味や射程範囲、効果をとらえるためには、これらのモデルが関与している配置、これらが存在させることに貢献する配置(モデルはこれについての解釈の鍵を与えてくれる)の中にこれらのモデルを置き直

さなければならない。遂行の観点からの分析は、こうした分析を促すために構想されている。エジプトの事例において、所有権の理論は、貧困者が経済的過程に統合されるような世界を構成することに貢献する（貧困者は、その家とその土地からなる資本の所有者としてみられる。彼はこれらを抵当に入れるかもしくは売却するように促される。しかもこの世界の外側では拒絶されながらも、そうなのである——いったん彼の家が売却されるや、彼は何も持たない）。遂行の分析は経済学を、表象（経済学が現実についてなにかを語る）と同時に、介入（経済学は現実の定式化に貢献する）として考えるように強いる。しかもこれらの2つの構成要素を分離することなしに、である。つまり経済学が語ることの内容と意味とは、それが作り出すものから独立しては評価されることはできないのである。

結局それぞれの事例において、経済学の遂行的次元は、（経済学を体現し、経済学が形と力を与える）配置の構成の中で表明されるのである。国民経済、「市場」と「非市場」との間の、もしくはフォーマルな経済とインフォーマルな経済との間の境界線を作り上げることは、経済学、そのモデル、その観念、その議論とその道具なしには、考えられないであろう。これらの配置は前節で提示された緊張を結合させている力線の交差点に置かれている。すなわちそこでは、配合は多様であろうが、理論と実験、心理性と物質性、分散とプログラム化、狭い展開と広範な展開とが見いだされる。（配置を構成するあらゆる物質と言説により、参集し、統合し、叙述すると同時に叙述され、働きかけると同時に働きかけられる）このようなアレンジメントが、しばしば経済的客観性を作り上げることになる。

結論

経済学の行為遂行性についてのテーゼは、かなり重要な同意だけでなく、また多くの対立した判断を、ないししばしば激しい攻撃をも引き起こした（Mackenzie, Muniesa et Siu 2007）。こうしたテーゼの評価（否定的でもあり肯定的でもある）の中心にあるのが、経済学批判の困難な問題なのである。そのような攻撃によれば、経済社会学における多くの研究は、その種別的貢献とならんで、少なくとも部分的には、経済学に対立すること、またこれを批判することで定義されるという。こうした批判的分析は通常、以下のような二つの方向の一つへと展開される（また、しばしば同時に二つの方向で）。第一の批判は認識論的な性格のものであり、経済学の内在的限界、つまりこの科学はせいぜい極端な状況にしか採用されないであろうという点を強調する（例えば、それは明示的に格付けられた生産物の競争市場にしか対応しない）。また最悪の場合、こうした内在的限界は、経済学をイデオロギーや神話化に近い学問とするような、誤った、検証されざる仮説にもとづいているものとして告発されるのである。第二の批判は最初の批判のいくつかの特徴を強調するものであって、力関係もしくは支配関係を隠蔽し、カムフラージュするための非現実的な一連の表象にしか過ぎないとして、経済学を告発する。これらの二つの批判はフラストレーションをためるものである。というのもこうした批判は、これらの知識がどのように機能するのか、それらがどのように経済実践に影響を与えるのかを経験的に観察することを免れているからである。行為遂行性というボキャブラリーは——我々

はそれを指摘することができたと期待しているのだが——、科学をたんなる表象体系へと縮減しないような科学概念へと訴えることで、批判の中心にある多くの配慮をとどめている。広義で考えられた経済学が、あらゆる科学と同様、力関係の組み立てに参画するのは、この科学が社会技術的配置の精緻化に介入するからなのである。経済学が、それに固有な効率性を持って、これらの配置に介入し、それが組織する経験から教訓を得ることができるのは、この科学がモデル化と表象（これらは真実の試験を関与させる）を産出するからなのである。経済に関心を向ける科学の遂行の作業を組み込む経済社会学は、経済的配置の構想と設定という、まさに政治的な問題を、よりよく解明するに違いないであろう。

文献

- Akrich M. (1987) "Comment decliner les objets techniques?", *Technique et culture*, 9, pp. 49-64.
- Akrich M. (1989) "La construction d'un système socio-technique: Esquisse pour une anthropologie des techniques", *Anthropologie et sociétés*, 13 (2), pp. 31-54.
- Akrich M., Callon M. et Latour B. (2006) *Sociologie de la traduction: Textes fondateurs*, Paris, Presses de l'Ecole des mines de Paris.
- Armatte M., Dahan D.-A. (2004) "Modèles et modélisations 1950-2000: Nouvelles pratiques, nouveaux enjeux", *Revue d'histoire des sciences*, 57 (2), pp. 243-303.
- Arthur B. (1994) *Increasing Returns and Path Dependence in the Economy*, Ann Arbor (Michigan), University of Michigan Press. (有賀裕二訳『収益増増と経路依存: 複雑系の経済学』多賀出版、2003)
- Babb S. (2004) *Managing Mexico: Economists from Nationalism to Neoliberalism*, Princeton, Princeton University Press.
- Barnes B. (1983) "Social life as bootstrapped induction", *Sociology*, 17 (4), pp. 524-545.
- Barry A. (2001) *Political Machines: Governing a Technological Society*, London, The Athlone Press.
- Beck, U., Giddens, A., Lash, S. (1994) *Reflexive Modernization: Politics, Tradition and Aesthetics in the Modern Social Order*, Cambridge, Polity Press. (松尾精文・小幡正敏・叶堂隆三訳『再帰的近代化』而立書房、1997)
- Bidet A., Boutet M., Le Bianic T., Minh F.-O., Palazzo C., Rot G. et Vatin F. (2003) "Le sens de la mesure. Manifeste pour l'économie en sociologie: usage de soi, rationalisation et esthétique au travail", *Terrains & travaux*, (4), pp. 207-214.
- Binmore K., Klemperer P. (2002) "The biggest auction ever: The sale of the British 3G telecom licences", *The Economic Journal*, 112 (478), C74-C96.
- Bockman J., Eyal G. (2002) "Eastern Europe as a laboratory for economic knowledge: The transnational roots of neoliberalism", *American Journal of Sociology*, 108 (2), pp.310-352.
- Bourdieu P. (1982) *Ce que parler veut dire: l'économie des échanges linguistiques*, Paris, Fayard. (稲賀繁美訳『話すということ: 言語的交換のエコノミー』藤原書店、1993)
- Burchell G., Gordon C., Miller P. (eds) (1991) *The Foucault Effect: Studies in Governmentality*, Chicago, University of Chicago Press.
- Butler J. (1990) *Gender Trouble: Feminism and the Subversion Identity*, London, Routledge. (竹村和子訳『ジェンダートラブル』青土社、1999)

- Butler J. (1997) *Excitable Speech: A Politics of the Performative*, London, Routledge. (竹村和子訳『触発する言葉』岩波書店、2015)
- Callon M. (1986) “Eléments pour une sociologie de la traduction : la domestication des coquilles Saint-Jacques et des marins pêcheurs dans la baie de Saint-Brieuc”, *L'Année sociologique*, 36, pp. 169-208.
- Callon M. (1991) “Réseaux technico-économiques et irréversibilités”, in Boyer R., Chavance B. et Godard O. (dir.), *Les figures de l'irréversibilité en économie*, Paris, EHESS, pp.195-230.
- Callon M. (1998) “Introduction: The embeddedness of economic markets in economics”, in Callon M. (eds), *The Laws of the Markets*, Oxford, Blackwell, pp. 1-57.
- Callon M. (2006) “L'Égypte et les experts”, *Gérer et Comprendre*, 86, pp.83-97.
- Callon M. (2007) “What does it mean to say that economics is performative?”, in MacKenzie D., Muniesa F., and Siu L. (eds), *Do Economists make Markets? On the Performativity of Economics*, Princeton, Princeton University Press, pp. 311-357.
- Callon M., Muniesa F. (2003) “Les marchés économiques comme dispositifs collectifs de calcul”, *Rezeaux*, 21 (122), pp. 189-233.
- Callon M., Lascoumes P., Barthe Y. (2001) *Agir dans un monde incertain: essai sur la démocratie technique*, Paris, Le Seuil.
- Callon M., Millo Y., Muniesa F. (eds) (2007) *Market Devices*, Oxford, Blackwell.
- Chiapello E. (2005) “Les normes comptables comme institution du capitalisme: une analyse du passage aux normes IFRS en Europe a partir de 2005”, *Sociologie du travail*, 47 (3), pp. 362-382.
- Chiapello E., Medjad K. (2007) “Une privatisation inédite de la norme: le cas de la politique comptable européenne”, *Sociologie du travail*, 49 (1), pp. 46-64.
- Cochoy F. (1999) *Une histoire du marketing: discipliner l'économie de marché*, Paris, La Découverte.
- Cochoy F. (2002) *Une sociologie du packaging ou l'âne de Buridan face au marché*, Paris, PUF.
- Conein B., Thévenot L. (dir.) (1997) *Cognition et information en société*, Paris, EHESS.
- Conein B., Dodier N., Thévenot L. (dir.) (1993) *Les objets dans l'action: de la maison au laboratoire*, Paris, EHESS.
- Cooren F. (2002) *The Organizing Property of Communication*, Amsterdam, John Benja-mins.
- Cooren F. (2004) “Textual agency: How texts do things in organizational settings”, *Organization*, 11 (3), pp. 373-393.
- Cooren F., Taylor J.-R., Van Every E. J. (eds) (2006) *Communication as Organizing: Empirical and Theoretical Explorations in the Dynamic of Text and Conversation*, Mahwah (NJ); Lawrence Erlbaum Associates.
- Cot A. L., Lallement J. (2006) “1859-1959: de Walras a Debreu, un siècle d'équilibre général”, *Revue économique*, 57 (3), pp. 377-388.
- David P. A. (1985) “Clio and the Economies of QWERTY”, *The American Economic Review*, 75 (2), pp.332-337.
- Denis J. (2006) “Les nouveaux visages de la performativité”, *Etudes de communication*, 29, pp. 7-24.
- De Soto H. (1989) *The Other Path: The Invisible Revolution in the Third World*, New York, Harper Collins.
- De Soto H., (2000) *The Mystery of Capital: Why Capitalism Triumphs in the West and Fails everywhere Else*, New York, Basic Books.
- Deleuze G., Guattari F. (1980) *Capitalisme et schizophrénie, t.2 : Mille plateaux*, Paris, Ed. de Minuit. (宇野邦一・小沢秋広ほか訳『千のプラトー』[上・中・下] 河出書房新社、2010)
- Deleuze G. (1989) “Qu'est-ce qu'un dispositif?”, in Michel Foucault *philosophe: rencontre internationale*, Paris, 9, 10, 11, janvier 1988, Paris, Le Seuil, pp. 185-195. (「装置とは何か」、宇野邦一監修・訳『ドゥルーズ・コレクシオン 2 権力／芸術』河出書房新社、2015)

- Desrosieres A. (1993) *La politique des grands nombres: histoire de la raison statistique*, Paris, La Découverte.
- Dezalay Y., Garth B.-G. (2002) *The Internationalization of Palace Wars: Lawyers, Economists, and the Contest to transform Latin American States*, Chicago, University of Chicago Press.
- Elyachar J. (2005) *Markets of Dispossession: NGOs, Economic Development, and the State in Cairo*, Durham (North Carolina), Duke University Press.
- Faulhaber G.-R., Baumol W.-J. (1988) "Economists as innovators: Practical products of theoretical research", *Journal of Economic Literature*, 26 (2), 577-600.
- Fligstein N., Dauter L. (2007) "The sociology of markets", *Annual Review of Sociology*, 33, pp.105-128.
- Foucault M. (2004) *Naissance de la biopolitique: cours au Collège de France (1978-1979)*, Paris, Gallimard -Le Seuil. (慎改康之訳『生政治の誕生：コレージュ・ド・フランス講義1978-1979年度』筑摩書房、2008)
- Fourcade M. (2007) "Theories of markets and theories of society", *American Behavioral Scientist*, 50 (8), pp.1015-1034.
- Fourcade-Gourinchas M. (2005) "Economics, sociology of", in Beckert J., Zafirovski M. (eds) *International Encyclopedia of Economic Sociology*, London, Routledge, pp. 210-216.
- Fourquet F. (1980) *Les comptes de la puissance: histoire de la comptabilité nationale et du plan*, Paris, Encres.
- Froud J., Johal S., Leaver A., and Williams K. (2006) *Financialisation and Strategy: Narrative and Numbers*, Oxon, Routledge.
- Galison P. (1997) *Image and Logic: A Material Culture of Microphysics*, Chicago, University of Chicago Press.
- Garcia M.-F. (1986) "La construction sociale d'un marché parfait: le marché au cadran de Fontaines-en-Sologne", *Actes de la recherche en sciences sociales*, 65, pp. 2-13.
- Goswami M. (2004) *Producing India: From Colonial Economy to National Space*, Chicago, University of Chicago Press.
- Grall B. (2004) *Economie de forces et production d'utilité: l'émergence du calcul économique chez les ingénieurs des Ponts et Chaussées (1831-1891)*, Rennes, PUR.
- Guala F. (2001) "Building economic machines: The FCC auctions", *Studies in History and Philosophy of Science*, 32 (3), pp. 453-477.
- Guala F. (2003) "Experimental localism and external validity", *Philosophy of Science*, 70 (5), pp. 1195-1205.
- Guala F. (2005) *The Methodology of Experimental Economics*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Guala F. (2007) "How to do things with experimental economics", in MacKenzie D., Muniesa F., and Siu L. (eds), *Do Economists make Markets? On the Performativity of Economics*, Princeton, Princeton University Press, pp. 128-162.
- Hacking I. (1983) *Representing and Intervening: Introductory Topics in the Philosophy of Natural Science*, Cambridge, Cambridge University Press. (渡辺博訳『表現と介入』筑摩書房、2015)
- Hecht G. (2004) *Le rayonnement de la France: Énergie nucléaire et identité nationale après la Seconde Guerre mondiale*, Paris, La Découverte.
- Helgason A., Palsson G. (1997) "Contested commodities: The moral landscape of modernist regimes", *The Journal of the Royal Anthropological Institute*, 3 (3) pp. 451-471.
- Helgason A., Palsson G. (1998) "Cash for quotas: Disputes over the legitimacy of an economic model of fishing in Iceland", in Carrier J. G. and Miller D. (eds), *Virtualism: A New Political Economy*, Oxford, Berg, pp.117-134.
- Holm P. (2007) "Which way is up on Callon?", in MacKenzie D., Muniesa F., and Siu L. (eds), *Do Economists make Markets? On the Performativity of Economics*, Princeton, Princeton University Press, 225-243.
- Holm P., Nölde N.-K. (2007) "Framing fish, making markets: The construction of Individual Transferable Quotas

- (ITQs)", in Callon M., Millo Y., and Muniesa F. (eds), *Market Devices*, Oxford, Blackwell, pp. 173-195.
- Kjellberg H., Helgesson C.-F. (2006) "Multiple versions of markets: Multiplicity and performativity in market practice", *Industrial Marketing Management*, 35 (7), pp. 839-855.
- Kjellberg H., Helgesson C.-F. (2007) "On the nature of markets and their practices", *Marketing Theory*, 7 (2), pp. 137-162.
- Klemperer P. (2004) *Auctions: Theory and Practice*, Princeton, Princeton University Press.
- Knorr Cetina K. (1999) *Epistemic Cultures: How the Sciences Make Knowledge*, Cambridge (MA), Harvard University Press.
- Latour B. (1984) *Les microbes: Guerre et paix*, Paris, Métailié.
- Latour B. (1994) "Une sociologie sans objet? Remarques sur l'interobjectivité", *Sociologie du travail*, 36 (4), pp. 587-607.
- Latour B. (1995) *La science en action: introduction a la sociologie des sciences*, Paris, Gallimard. (川崎勝・高田紀代志訳『科学が作られているとき』産業図書、1999)
- Latour B. (1996) "Sur la pratique des théoriciens", in Barbier J.-M. (dir.), *Savoirs théoriques et savoirs pratiques*, Paris, PUF, pp. 131-145.
- Latour B. (1999) *Politiques de la nature: Comment faire entrer les sciences en démocratie*, Paris, La Découverte.
- Lebaron F. (2000) *La croyance économique: Les économistes entre science et politique*, Paris, Le Seuil.
- Lenglet M. (2006) "Des paroles aux actes: Usages contemporains de la performativité dans le champ financier", *Etudes de Communication*, 29, 39-51.
- Lyotard J.-F. (1979) *La condition postmoderne: Rapport sur le savoir*, Paris, Ed. de Minuit. (小林康夫訳『ポスト・モダンの条件』書肆風の薔薇、1986)
- MacKenzie D. (2003) "An equation and its worlds: Bricolage, exemplars, disunity and performativity in financial economics", *Social Studies of Science*, 33 (6), 831-868.
- MacKenzie D. (2004) "The big, bad wolf and the rational market: Portfolio insurance, the 1987 crash and the performativity of economics", *Economy and Society*, 33 (3), 303-334.
- MacKenzie D. (2006) *An Engine, not a Camera: How Financial Models shape Markets*, Cambridge (MA), MIT Press.
- MacKenzie D. (2007) "Is economics performative? Option theory and the construction of derivative markets", in MacKenzie D., Muniesa F., and Siu L. (eds), *Do Economists make Markets? On the Performativity of Economics*, Princeton, Princeton University Press, 54-86.
- MacKenzie D., Milio Y. (2003) "Constructing a market, performing theory: The historical sociology of a financial derivatives exchange", *American Journal of Sociology*, 109 (1), pp. 107-145.
- MacKenzie D., Muniesa F., Siu L. (eds.) (2007) *Do Economists make Markets? On the Performativity of Economics*, Princeton, Princeton University Press.
- Merton R. K. (1949) *Social Theory and Social Structure*, New York, The Free Press. (森東吾ほか訳『社会理論と社会構造』みすず書房、1961)
- Meynaud H.-Y. (dir.) (1996) *Les sciences sociales et l'entreprise: cinquante ans de recherches à EDF*, Paris, La Découverte.
- Milgrom P. (2004) *Putting Auction Theory to Work*, Cambridge, Cambridge University Press, 2004. (計盛英一郎・馬場弓子訳『オークション理論とデザイン』東洋経済新報社、2007)
- Miller P., Rose N. (1990) "Governing economic life", *Economy and Society*, 19 (1), pp. 2-31.
- Miller P., Rose N. (2008) *Governing the Present: Administering Economic, Social and Personal Life*, Cambridge,

- Polity Press.
- Mirowski P., Nik-Khah E. (2007) "Markets made flesh : Performativity, and a problem in science studies, augmented with consideration of the FCC auctions", in MacKenzie D., Muniesa F., and Siu L. (eds), *Do Economists make Markets? On the Performativity of Economics*, Princeton, Princeton University Press, pp. 190-224.
- Mitchell T. (1998) "Fixing the economy", *Cultural Studies*, 12 (1), 82-101.
- Mitchell T. (2002) *Rule of Experts: Egypt, Techno-politics, Modernity*, Berkeley, University of California Press.
- Mitchell T. (2005) "The work of economics: How a discipline makes its world", *European Journal of Sociology*, 46 (2), 297-320.
- Mitchell T. (2007) "The properties of markets", in MacKenzie D., Muniesa F., and Siu L. (eds), *Do Economists make Markets? On The Performativity of Economics*, Princeton, Princeton University Press, pp. 244-275.
- Mol A. (2002) *The Body Multiple: Ontology in Medical Practice*, Durham (Ne), Duke University Press.
- Muniesa F., Callon M. (2007) "Economic experiments and the construction of markets", in MacKenzie D., Muniesa F., and Siu L. (eds), *Do Economists make Markets? On the Performativity of Economics*, Princeton, Princeton University Press, 163-189.
- Muniesa F., Linhardt D. (2006) "Acteur-reseau (theorie de l') ", in Sylvie Mesure et Patrick Savidan (dir.), *Dictionnaire des sciences humaines*, Paris, PUF, pp.4-6.
- Muniesa F., Millo Y., Callon M. (2007) "An introduction to market devices", in Callon M., Millo Y., and Muniesa F. (eds), *Market Devices*, Oxford, Blackwell, pp. 1-12.
- Nelson R. H. (1987) "The economics profession and the making of public policy", *Journal of Economic Literature*, 25 (1), pp. 49-91.
- Orlean A. (1999) *Le pouvoir de la finance*, Paris, Odile Jacob. (坂口明義・清水和巳訳『金融の権力』藤原書店、2001)
- Pestre D. (2006) *Introduction aux Science Studies*, Paris, La Decouverte.
- Picard J.-F., Beltran A., Bungener M. (1985) *Histoire(s) de l'EDF: comment se sont prises les decisions de 1946 a nos jours*, Paris, Dunod.
- Pinch T., Swedberg R. (eds) (2008) *Living in a Material World: Economic Sociology meets Science and Technology Studies*, Cambridge (MA), The MIP Press.
- Pickering A. (1995) *The Mangle of Practice: Time, Agency and Science*, Chicago, University of Chicago Press.
- Plott C. R. (1997) "Laboratory experimental testbeds: application to the PCS auction", *Journal of Economics and Management Strategy*, 6 (3), 605-638.
- Recanat F. (1979) *La transparence et l'énonciation*, Paris, Le Seuil.
- Recanat F. (1982) *Les énonces performatifs: Contribution a la pragmatique*, Paris, Ed. de Minuit.
- Simonin J.-P., Vatin F. (dir.) (2002) *L'oeuvre multiple de Jules Dupuit (1804-1866): Calcul d'ingénieur, analyse économique et pensée sociale*, Angers, Presses Universitaires d'Angers.
- Steiner P. (1998) *Sociologie de la connaissance économique: essai sur les rationalisations de la connaissance économique (1750-1850)*, Paris, PUF.
- Steiner P. (2007) *La sociologie économique*, Paris, La Découverte.
- Valdes J. G. (1995) *Pinochet's economists: The Chicago School in Chile*, Cambridge, Cambridge University Press.
- Vatin F. (2007) *Morale industrielle et calcul économique dans le premier XIX' siecle: l'économie industrielle de Claude-Lucien Bergery (1787-1863)*, Paris, L'Harmattan.
- Vatin F. (2008) "L'esprit d'ingénieur: pensée calculatoire et éthique économique", *Revue française de socio-économie*, 1, pp. 131-152.

Vinck D. (2007) *Sciences et société: Sociologie du travail scientifique*, Paris, Armand Colin.

Wilen J. E. (2000) "Renewable resource economists and policy: What differences have we made?", *Journal of Environmental Economics and Management*, 39 (3), 206-327.

